

# 生きがいのある仕事を — 神谷美恵子 ころろの旅 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

人間の生活は基本的に仕事をすることで成り立っています。正規の職業はもとよりアルバイトもパートも派遣も仕事であることに変わりありません。家庭における家事や育児や介護なども重要な仕事とっていいでしょう。

とりあえず仕事は生活を維持するための手段と見做すことができます。しかしそれだけで人間は満たされるのかと問いかけた医師がいました。神谷美恵子(1914—1979)はハンセン病の患者を精神科医として支えることをライフワークとして選択しました。彼女の仕事をたんなる生活の手段と片づけることはできません。

現在もロングセラーをつづける哲学的随想を通じて彼女は人間の生活や仕事について省察しました。年頭にあたり、あらためて異彩を放つ足跡と共に仕事とは何かを考えてみたいと思います。

## 天啓に打たれたように

美恵子は内務省に勤務する父の前田多門と妻の房子の長女として岡山県岡山市で生まれました。高級官僚の父は転勤が多く、一家は頻繁に転居しています。両親が外国へ出張しているときは親戚の家に預けられることもありました。

内務省退職後、父は東京市助役となり、美恵子は聖心女子学院小学部に通います。父が国際労働機関の日本代表に任命されると、一家でスイスのジュネーヴに移り住みました。美恵子はジャン＝ジャック・ルソー教育研究所付属小学校でフラン

ス語を習得し、ピアノを弾くことが大好きな少女として成長します。この頃、両親は結婚式の媒酌人で国際連盟事務次長を務めていた新渡戸稲造と親密に交際し、美恵子も新渡戸を慕っていました。

帰国後、自由学園から成城高等女学校に転入し、叔父の金澤常雄が主催する聖書研究会に参加します。叔父は内村鑑三が提唱する無教会主義の伝道師をしていました。津田英学塾に進学した美恵子は叔父からオルガン奏者としてハンセン病療養所への同行を求められます。皮膚や末梢神経を侵すハンセン病は当時、完治できない難病として恐れられ、患者たちは強制的に隔離されていました。

叔父と共に多摩全生園を訪れた美恵子は予想もしなかった光景に驚愕します。患者たちは悲惨な境遇にありながら生きる喜びを語り、声高らかに讚美歌を歌っていました。驚きはいつしか深い感動に変わっていきます。美恵子は天啓に打たれたように「自分はハンセン病患者に呼ばれている」と感じたそうです。そして医師としてハンセン病患者の役に立ちたいと願うようになりました。

思いきって両親に打ち明けたものの猛反対され、彼女は失意のうちに津田英学塾の塾長の薦めに従って大学部へ進みます。しかし医師となって



神谷美恵子

ハンセン病患者に奉仕したいという想いを簡単に棄て去ることはできませんでした。

### 闘病と戦争と切実な願い

充たされぬ日々を過ごすうち美恵子是不治の病いといわれた結核に感染します。軽井沢で療養中、とりとめのない不安に怯えながらもドイツ語、イタリア語、ギリシア語などの独学に励みます。悔いの残らないように世界の古典文学をできる限り原書で読みたいという想いが闘病の励みになりました。とりわけ軍事よりも学問を好んだという第16代ローマ帝国皇帝マルクス・アウレリウスの『自省録』を愛読し、のちに翻訳書を出版しています。読書に明け暮れるなか医師の薦めで受けた治療法が功を奏し、やがて結核は完治しました。

1937年の盧溝橋事件をきっかけに軍部は中国に侵攻し、日中戦争が勃発します。日本を非難するアメリカとの外交関係の悪化を懸念した政府はニューヨークに日本文化会館を設け、朝日新聞の論説委員を務めていた父を初代館長に任命します。一家は揃って渡米し、コロンビア大学でギリシア古典文学を学び始めた美恵子は医学部への転部を再三にわたって父に願い、ついに医学進学課程への転入を果たします。ところが日米開戦の危機が迫り、急遽帰国を余儀なくされました。美恵子は東京女子医学専門学校に入学し、瀬戸内海の長島にあるハンセン病療養所・長島愛生園に泊り込むなど患者たちとの交流に情熱を注ぎます。

女子医専卒業後、東京帝国大学精神科医局へ入り、のちに著書のタイトルにもなる「こころの旅」を開始します。1945年3月11日の東京大空襲で実家が全焼し、家族が疎開するなか精神科病棟で暮らしながら患者の治療にあたりました。

太平洋戦争が終結すると父は東久邇宮内閣の文部大臣に抜擢され、美恵子は秘書として連合国軍との折衝や外交文書の翻訳などに従事します。私生活では東大の講師をしていた植物学者の神谷宣郎と結婚し、ふたりの息子をもうけました。夫が大阪大学教授に招聘されると一家で移り住み、家事と育児に追われながら『自省録』の翻訳書を刊行し、アテネ・フランセなどで語学を教えます。

ところが41歳のとき子宮がんが発覚します。

幸い初期で治癒したものの、また再発するかもしれません。美恵子は本来の仕事であるハンセン病患者の治療に戻りたいと切実に願いました。

### すべてを未来にかけて

長島愛生園への訪問を再開した美恵子はハンセン病患者の精神医学研究で学位を取得します。神戸女学院大学、母校の津田塾大学で教鞭を執り、1965年から長島愛生園の精神科医長として患者の治療に励みました。その一方でフランスの哲学者ミシェル・フーコーの著作の翻訳やイギリスの作家ヴァージニア・ウルフの病跡学研究を行っています。同時期に代表的著作『生きがいについて』を出版しました。狭心症で倒れて以降は入退院を繰り返し、心不全によって65歳で亡くなります。長島愛生園には約15年間にわたって通いつづけました。ハンセン病患者の「心の友とさせていたことが光栄である」と感謝しています。

生きがいについて彼女は「人間がいきいきと生きていくために生きがいほど必要なものはない」と明記しています。それでは生きがいとは何でしょうか。「フランス語でいう存在理由とあまりちがわないかもしれないが、むしろ生存理由といったほうがよさそうに思える」と生きるために欠かせないものと定義しています。わかりやすくいうと「ひとに真のよろこびをもたらすものこそ、そのひとの生きがいとなりうるもの」です。そして生きがいさえあれば「ひとはべつに生活上の必要にせまられなくても、わざわざ努力を要する仕事に就き、ある目標にむかって歩もうとする」と説いています。何かを成し遂げようと懸命に努力しているとき人間は苦勞を惜しみません。困難な仕事も目標への試練として受け止めるからです。

若者たちに彼女は「現在の幸福と未来の希望と、どちらが人間の生きがいにとって大切かといえば、いうまでもなく希望のほうであろう。それゆえに高給でも将来性のない仕事ならば、えらばないほうがよい」とアドバイスしています。若者は未来に生きると言いたかったのでしょう。「過去という重い荷に制約されることなく、すべてを未来にかけて、わき目もふらずに何ものかを創り出そう」と希望に燃える若者たちに未来を託しています。